

表1-1-3 食事中断を解決する際の視点と方法の組み合わせ

必要な視点・留意点		解決方法(分類コードによる)	実施率
身体状況	体調、睡眠	「体調」 「本人の気持ち・意志」 「気分」 「睡眠時間・状況」	14.2
	排泄状況	「排便状況」 「水分摂取状況」 「気分」	16.6
	口腔機能	「咀嚼力」 「嚥下状態・嚥嚥」 「口腔状況」 「食料の質(形・固さ・味・匂い・温度)」	24.8
	嚥下機能	「嚥下状態・嚥嚥」 「認知症の症状」 「気分」 「スタッフの声かけ内容・見守り方」	7.2
心理	活動量	「運動量」 「体調」 「水分摂取状況」 「排泄状況」 「満腹感・空腹感」	7.2
	心理面	「本人の気持ち・意志」 「気分」 「心配ごと・不満」	8.6
	認知機能	「目録」 「認知機能」 「姿勢」 「本人の気持ち・意志」 「視力・聴覚機能」 「スタッフの声かけ内容・見守り方」	73.4
	食事の嗜好	「食の嗜好・興味・意欲」 「気分」	67.3
食事状況	食習慣	「生活習慣(ご年齢)」 「生活歴(幼少期から)」 「家族関係」 「本人の気持ち・意志」 「食の嗜好・興味・意欲」	15.3
	器付・配置	「食器の配置」 「盛付」 「食料の質(形・固さ・味・匂い・温度)」 「認知機能」	7.8
			17.3
			16.3

必要な視点・留意点		解決方法(分類コードによる)	実施率
食事状況	食事量	「最近の食事量」 「当日の食事量・おやつ量」 「満腹感・空腹感」 「盛付」 「食の嗜好・興味・意欲」 「食料の質(形・固さ・味・匂い・温度)」	6.5
			18.3
			6.0
			4.7
物理的・人的環境	食料	「食料の質(形・固さ・味・匂い・温度)」 「食の嗜好・興味・意欲」 「盛付」 「咀嚼力」	21.7
	物理的・人的環境	「周囲の雰囲気・刺激(音・光・匂い)」 「席の位置」 「他の入居者との関係」 「気分」 「スタッフの声かけ内容・見守り方」	9.7
			8.8
			4.6
人間関係	食料	「食料の質(形・固さ・味・匂い・温度)」 「食の嗜好・興味・意欲」 「盛付」 「咀嚼力」	22.3
	物理的・人的環境	「周囲の雰囲気・刺激(音・光・匂い)」 「席の位置」 「他の入居者との関係」 「気分」 「スタッフの声かけ内容・見守り方」	8.4
			32.4
			13.1
人間関係	食料	「食料の質(形・固さ・味・匂い・温度)」 「食の嗜好・興味・意欲」 「盛付」 「咀嚼力」	9.2
	物理的・人的環境	「周囲の雰囲気・刺激(音・光・匂い)」 「席の位置」 「他の入居者との関係」 「気分」 「スタッフの声かけ内容・見守り方」	21.8
			10.8
			6.4
人間関係	食料	「食料の質(形・固さ・味・匂い・温度)」 「食の嗜好・興味・意欲」 「盛付」 「咀嚼力」	7.0
	物理的・人的環境	「周囲の雰囲気・刺激(音・光・匂い)」 「席の位置」 「他の入居者との関係」 「気分」 「スタッフの声かけ内容・見守り方」	11.6
			7.4
			8.1
人間関係	食料	「食料の質(形・固さ・味・匂い・温度)」 「食の嗜好・興味・意欲」 「盛付」 「咀嚼力」	9.8
	物理的・人的環境	「周囲の雰囲気・刺激(音・光・匂い)」 「席の位置」 「他の入居者との関係」 「気分」 「スタッフの声かけ内容・見守り方」	8.6
			8.9
			8.0
人間関係	食料	「食料の質(形・固さ・味・匂い・温度)」 「食の嗜好・興味・意欲」 「盛付」 「咀嚼力」	26.4
	物理的・人的環境	「周囲の雰囲気・刺激(音・光・匂い)」 「席の位置」 「他の入居者との関係」 「気分」 「スタッフの声かけ内容・見守り方」	10.6

表1-2-1 清拭拒否を解決する際の視点と方法の組み合わせ

	必要視点・留意点	解決方法(分類コードによる)	実施率
身体状況	清潔度 「清潔度」 「皮膚状態」 「服装状態」 「生活習慣」 「食生活」 「睡眠状態」 「排便状況」 「体位変化」 「歩行能力」 「排泄機能」 「家族関係」	トイレ時に実施 清潔を確保するため 清潔、血行など効果を確認 1人で 適切なタオルを渡し自分で 部分から開始 トイレ時に実施 清潔時間を本人のペースで 清潔を確保するため 清潔、血行など効果を確認 声かけを簡単に 信頼関係が生まれている介助者 コンプレックスを軽減 気持ちをつくらせる 家族からの依頼 内科受診のため 他者から指導 お礼やねぎらいを 部分から開始 清潔時間を本人のペースで 気持ちをつくらせる 家族からの依頼 清潔を確保するため 声かけの頻度の工夫 声かけを簡単に お礼やねぎらいを 清潔場所の調整 機数のスタッフ 適切なタオルを渡し自分で 部分から開始 トイレ時に実施 気持ちをくつらげる 清潔を確保するため 声かけの頻度の工夫 温度調節 清潔布の温度 清潔場所の調整 部分から開始 家族からの依頼 内科受診のため 温度調節 信頼関係が生まれている介助者 家族の協力 コンプレックスを軽減 トイレ時に実施 清潔時間を本人のペースで 気持ちをつくらせる 家族からの依頼 内科受診のため 他者から指導 声かけを簡単に 温泉に誘う 清潔布の温度 信頼関係が生まれている介助者 コンプレックスを軽減	21.0 20.5 22.9 6.0 5.5 14.8 5.9 5.4 7.9 13.5 12.2 17.4 5.9 16.9 10.3 5.3 6.7 6.2 7.7 7.9 6.9 0.0 8.0 9.5 19.7 8.6 7.1 7.7 5.8 6.4 6.2 5.0 9.3 5.6 6.9 12.9 12.5 5.9 5.9 22.9 8.6 10.0 6.4 18.5 5.2 5.1 9.3 5.4 10.0 10.2 5.0 6.7 6.0 7.7 8.6 5.8
	心理	「興味・関心」 「本人の気持ち、意志」 「気分」 「性格」 「スタッフの声かけ内容、見守り方」 「本人の気持ち、意志」 「気分」 「清潔時間等」	
	性格	「清潔布の温度」 「清拭タオルの温度」 「本人の気持ち、意志」 「気分」 「清潔時間等」	
	入浴習慣	「家族関係」 「入浴習慣（自宅）」 「浴室設備（自宅）」 「過去の入浴体験」 「生活歴（幼少期から）」 「入浴習慣（自宅）」 「本人の気持ち、意志」 「認知機能」 「家族関係」	
	入浴方法		
	入浴習慣		

必要な視点・留意点		解決方法(分類コードによる)		実施率
介護者の性別	介護者の性別	「本人の気持ち・意志」 「スタッフの声かけ内容・見守り方」 「介護者の性別」 「興味・関心」 「言語理解」	部分から開始 トイレ時に実施 気持ちをくつろがせる 声かけの態度の工夫 声かけを覚悟に お礼やねぎらいを 1人で 信頼関係が出来ている介助者 コンプレックスを軽減	5.2 5.3 17.0 16.7 11.0 7.2 14.6 13.7 5.9
	介護者の性別	「スタッフの声かけ内容・見守り方」 「介護者の性別」 「下着の状態」 「気分」 「失禁有無」 「排泄時間帯」	トイレ時に実施 気持ちをくつろがせる 清潔・血行など効果の説明 声かけの態度の工夫 お礼やねぎらいを 1人で 信頼関係が出来ている介助者 コンプレックスを軽減	13.1 7.7 17.0 5.4 7.3 5.0 6.1 15.9
	声かけ方法	「本人の気持ち・意志」 「気分」 「生活歴(年少期から)」 「言語理解」	部分から開始 気持ちをくつろがせる 家族からの依頼 声かけの態度の工夫 温度調節 排泄場所の調整 1人で コンプレックスを軽減	5.6 17.8 8.4 8.6 5.3 6.6 5.3 10.5
人間関係	スタッフ関係	「性格」 「スタッフとの関係」 「スタッフの声かけ内容・見守り方」 「本人の気持ち・意志」	家族からの依頼 声かけの態度の工夫 お礼やねぎらいを 信頼関係が出来ている介助者 コンプレックスを軽減	5.6 15.5 15.4 20.7 11.6
	人間関係	「他の入居者との関係」 「スタッフとの関係」 「本人の気持ち・意志」 「性格」	他者から誘導 排泄場所の調整 1人で 信頼関係が出来ている介助者 複数のスタッフ コンプレックスを軽減	22.0 5.3 27.1 6.1 5.4 17.5

表1-2-3 入浴拒否を解決する際の視点と方法の組み合わせ

必要な視点・留意点		解決方法(分類コードによる)		実施率	
身体状況	体調	「通気・減圧感」 「入浴前」 「本人の気持ち・意図」 「気分」 「認知機能」	本人の体調に合わせた時間 入浴前コミュニケーション 暖まるからと声かけ 入浴中のコミュニケーションを増やす 浴室温度を調整 湯温の調整 拒否の理由問う	5.4 5.8 11.0 7.8 13.0 8.4 12.8	6.7 6.4 15.3 5.2 7.1 5.0 6.7
	失禁有無	「失禁有無」 「排泄状況」 「下着の状況」 「スタッフの声かけ内容・見守り方」 「本人の気持ち・意図」	トイレ誘導時に一緒に 段階的な誘導	33.6 6.6	6.6 7.7
	気分	「本人の気持ち・意図」 「スタッフとの関係」「スタッフの声かけ内容・見守り方」 「興味・関心」	入浴前コミュニケーション 繰り返し誘導 入浴中のコミュニケーションを増やす 笑顔でゆっくり おしゃべり	12.0 5.8 8.6 8.4 6.1	30.7 7.5 8.5 8.4 6.8
	興味関心	「本人の気持ち・意図」 「気分」 「スタッフの声かけ内容・見守り方」 「生活歴(年少期から)」 「スタッフとの関係」	入浴前コミュニケーション 趣味活動を実施した 本人の体調に合わせた 繰り返し誘導	14.7 8.8 6.9 7.5 10.1	5.8 7.1 6.3
	認知機能	「スタッフの声かけ内容・見守り方」 「気分」 「認知機能」 「認知機能」 「スタッフとの関係」	入浴前コミュニケーション 繰り返し誘導 浴室へ誘導し脱着を促す 入浴中のコミュニケーションを増やす 笑顔でゆっくり	8.1 5.8 6.2 7.0 7.8	13.2 21.3 8.0 8.2 5.1 5.9 8.1
性格	性格	「性格」 「スタッフの声かけ内容・見守り方」 「本人の気持ち・意図」 「気分」 「性別」 「認知機能」	本人の体調に合わせた時間 入浴前コミュニケーション 暖まるからと声かけ 本人の体調に合わせた 繰り返し誘導 浴室へ誘導し脱着を促す 身体の一部から 段階的な誘導 入浴中のコミュニケーションを増やす 笑顔でゆっくり 他々にお湯をかける 浴室温度を調整 湯温の調整	5.6 11.8 6.0 6.1 5.1 5.7 6.1 7.1 5.7 6.6 5.6 5.7 5.1	5.6 11.8 6.0 6.1 5.1 5.7 6.1 7.1 5.7 6.6 5.6 5.7 5.1
	人間関係	「気分」 「興味・関心」 「他の入浴者との関係」 「家族関係」	家族から入浴情報を得る 薬を塗るため、医師の指示 家族の面会・依頼 他者から誘導 仲の良い人と一緒に	5.7 8.2 6.9 8.3 5.5	8.0 5.6 8.1 10.1 8.1 8.3 6.9 5.5
その他		「スタッフの声かけ内容・見守り方」 「スタッフとの関係」	入浴前コミュニケーション 繰り返し誘導 入浴中のコミュニケーションを増やす 笑顔でゆっくり おしゃべり 同性介護 複数のスタッフ スタッフを分けた	8.0 5.6 8.1 10.1 8.1 8.3 6.9 5.5	8.0 5.6 8.1 10.1 8.1 8.3 6.9 5.5

表1-3-2 排泄介護拒否を解決する際の視点と方法の組み合わせ

必要視点・留意点		解決方法(分類コードによる)		実施率
認知機能	必要視点・留意点	解決方法(分類コードによる)	実施率	実施率
認知機能	必要視点・留意点	「本人の気持ち、意志」	15.7	15.7
		「性格」	5.8	5.8
		「認知機能」	5.7	5.7
		「本人の気持ち、意志」	14.3	14.3
		「性格」	8.8	8.8
		「認知機能」	10.9	10.9
		「本人の気持ち、意志」	7.9	7.9
		「性格」	8.9	8.9
		「認知機能」	13.1	13.1
		「本人の気持ち、意志」	5.3	5.3
心理	必要視点・留意点	「本人の気持ち、意志」	7.3	7.3
		「性格」	6.6	6.6
		「認知機能」	12.8	12.8
		「本人の気持ち、意志」	15.0	15.0
		「性格」	6.8	6.8
		「認知機能」	8.1	8.1
		「本人の気持ち、意志」	5.2	5.2
		「性格」	16.4	16.4
		「認知機能」	6.9	6.9
		「本人の気持ち、意志」	5.3	5.3
皮膚状態	必要視点・留意点	「本人の気持ち、意志」	12.0	12.0
		「性格」	7.2	7.2
		「認知機能」	17.9	17.9
		「本人の気持ち、意志」	5.1	5.1
		「性格」	9.7	9.7
		「認知機能」	12.6	12.6
		「本人の気持ち、意志」	5.2	5.2
		「性格」	13.7	13.7
		「認知機能」	7.8	7.8
		「本人の気持ち、意志」	6.8	6.8
排泄状況	必要視点・留意点	「本人の気持ち、意志」	25.3	25.3
		「性格」	6.0	6.0
		「認知機能」	5.6	5.6
		「本人の気持ち、意志」	6.6	6.6
		「性格」	24.7	24.7
		「認知機能」	11.4	11.4
		「本人の気持ち、意志」	17.7	17.7
		「性格」	10.7	10.7
		「認知機能」	11.2	11.2
		「本人の気持ち、意志」	7.6	7.6
様子	必要視点・留意点	「本人の気持ち、意志」	16.8	16.8
		「性格」	38.8	38.8
		「認知機能」	5.6	5.6
		「本人の気持ち、意志」	8.2	8.2
		「性格」	5.1	5.1
		「認知機能」	7.6	7.6
		「本人の気持ち、意志」	9.4	9.4
		「性格」	13.2	13.2
		「認知機能」	7.4	7.4
		「本人の気持ち、意志」	7.6	7.6
様子	必要視点・留意点	「本人の気持ち、意志」	5.3	5.3
		「性格」	15.1	15.1
		「認知機能」	15.1	15.1
		「本人の気持ち、意志」	15.1	15.1
		「性格」	15.1	15.1
		「認知機能」	15.1	15.1
		「本人の気持ち、意志」	15.1	15.1
		「性格」	15.1	15.1
		「認知機能」	15.1	15.1
		「本人の気持ち、意志」	15.1	15.1

必要視点・留意点		解決方法(分類コードによる)		実施率
場所	必要視点・留意点	解決方法(分類コードによる)	実施率	実施率
対応方法	必要視点・留意点	「本人の気持ち、意志」	15.7	15.7
		「性格」	5.8	5.8
		「認知機能」	5.7	5.7
		「本人の気持ち、意志」	14.3	14.3
		「性格」	8.8	8.8
		「認知機能」	10.9	10.9
		「本人の気持ち、意志」	7.9	7.9
		「性格」	8.9	8.9
		「認知機能」	13.1	13.1
		「本人の気持ち、意志」	5.3	5.3
関係	必要視点・留意点	「本人の気持ち、意志」	7.3	7.3
		「性格」	6.6	6.6
		「認知機能」	12.8	12.8
		「本人の気持ち、意志」	15.0	15.0
		「性格」	6.8	6.8
		「認知機能」	8.1	8.1
		「本人の気持ち、意志」	5.2	5.2
		「性格」	16.4	16.4
		「認知機能」	6.9	6.9
		「本人の気持ち、意志」	5.3	5.3
関係	必要視点・留意点	「本人の気持ち、意志」	12.0	12.0
		「性格」	7.2	7.2
		「認知機能」	17.9	17.9
		「本人の気持ち、意志」	5.1	5.1
		「性格」	9.7	9.7
		「認知機能」	12.6	12.6
		「本人の気持ち、意志」	5.2	5.2
		「性格」	13.7	13.7
		「認知機能」	7.8	7.8
		「本人の気持ち、意志」	6.8	6.8
関係	必要視点・留意点	「本人の気持ち、意志」	25.3	25.3
		「性格」	6.0	6.0
		「認知機能」	5.6	5.6
		「本人の気持ち、意志」	6.6	6.6
		「性格」	24.7	24.7
		「認知機能」	11.4	11.4
		「本人の気持ち、意志」	17.7	17.7
		「性格」	10.7	10.7
		「認知機能」	11.2	11.2
		「本人の気持ち、意志」	7.6	7.6
関係	必要視点・留意点	「本人の気持ち、意志」	16.8	16.8
		「性格」	38.8	38.8
		「認知機能」	5.6	5.6
		「本人の気持ち、意志」	8.2	8.2
		「性格」	5.1	5.1
		「認知機能」	7.6	7.6
		「本人の気持ち、意志」	9.4	9.4
		「性格」	13.2	13.2
		「認知機能」	7.4	7.4
		「本人の気持ち、意志」	7.6	7.6
関係	必要視点・留意点	「本人の気持ち、意志」	5.3	5.3
		「性格」	15.1	15.1
		「認知機能」	15.1	15.1
		「本人の気持ち、意志」	15.1	15.1
		「性格」	15.1	15.1
		「認知機能」	15.1	15.1
		「本人の気持ち、意志」	15.1	15.1
		「性格」	15.1	15.1
		「認知機能」	15.1	15.1
		「本人の気持ち、意志」	15.1	15.1

表1-3-3 放尿を解決する際の視点と方法の組み合わせ

必要な視点・留意点		解決方法(分類コードによる)	実施率
排泄状況	排泄パターン	「排泄間隔」 「排泄頻度」	排尿パターンに応じ 63.7
		誘導回数を増やす	23.2
	間隔頻度	「排泄間隔」 「スタッフの声かけ内容・見守り方」 「排泄頻度」 「本人の気持ち、意志」 「尿意・排泄感覚」	排尿パターンに応じ 24.4
		誘導回数を増やす	27.1
		状態に応じた	32.4
		繰り返し説明	8.4
	失禁尿意	「排泄・排尿時間」 「排泄間隔」 「尿意・排泄感覚」 「失禁有無」 「水分状態」 「本人の気持ち、意志」	排尿パターンに応じ 47.5
		誘導回数を増やす	26.7
		状態に応じた	15.2
		繰り返し説明	9.5
	尿意	「尿意・排泄感覚」 「本人の気持ち、意志」 「スタッフの声かけ内容・見守り方」	排尿パターンに応じ 11.8
		状態に応じた	45.8
	排泄習慣	「生活状況(数日内)」 「排泄・排尿時間」 「排泄間隔」 「睡眠時間・状況」	排尿パターンに応じ 34.8
		誘導回数を増やす	11.5
		状態に応じた	30.4
		ポータブルトイレ	4.9
		薬調整、受診	6.3
		オムツパッドへの変更	4.7
様子	表情様子	「スタッフの声かけ内容・見守り方」 「スタッフとの関係」 「放尿時の様子」 「放尿時の表情」	排尿パターンに応じ 10.1
		誘導回数を増やす	9.1
		状態に応じた	41.1
		ポータブルトイレ	10.3
		繰り返し説明	11.6
	様子	「放尿時の様子」 「本人の気持ち、意志」 「尿意・排泄感覚」 「排泄場所」 「スタッフの声かけ内容・見守り方」	状態に応じた 45.7
		トイレが見えるよう	5.7
		ポータブルトイレ	15.2
環境	トイレ環境	「トイレの表示」 「トイレの場所」 「トイレの扉」	トイレが見えるよう 13.3
		ポータブルトイレ	3.5
		夜間照明	20.2
		トイレ表示の工夫	50.1
	トイレ場所	「トイレの場所」 「排泄場所」 「排泄・排尿時間」 「歩行・下肢機能」 「本人の気持ち、意志」	排尿パターンに応じ 8.4
		誘導回数を増やす	8.0
		状態に応じた	7.4
		ポータブルトイレ	21.3
		トイレの位置調整	9.2
		夜間照明	15.0
		繰り返し説明	12.0
	場所	「スタッフの声かけ内容・見守り方」 「トイレの場所」 「トイレの表示」 「スタッフとの関係」 「排泄場所」 「見当識」	状態に応じた 15.4
		トイレが見えるよう	8.3
		トイレの位置調整	7.6
		夜間照明	13.8
		トイレ表示の工夫	21.1
		繰り返し説明	22.0
	表示	「スタッフの声かけ内容・見守り方」 「本人の気持ち、意志」 「生活習慣(ここ数年)」 「トイレの表示」	状態に応じた 14.8
		トイレが見えるよう	9.4
		ポータブルトイレ	6.0
		トイレの位置調整	6.5
		夜間照明	9.0
		トイレ表示の工夫	29.2
職員関係	スタッフ関係	「スタッフの声かけ内容・見守り方」 「本人の気持ち、意志」 「スタッフとの関係」 「気分」	排尿パターンに応じ 9.5
		誘導回数を増やす	8.8
		状態に応じた	44.7
		繰り返し説明	11.0

厚生労働科学研究費補助金（長寿科学総合研究事業）
総合研究報告書

認知症高齢者に対する日常生活介護のニーズと状態像に関する研究
ーニーズ（課題）と状態像の関係ー

研究分担者 内藤 佳津雄（日本大学文理学部）

研究要旨

認知症高齢者の日常生活における介護ニーズをもつ場合の状態像について数量的に明らかにするために、全国の特別養護老人ホーム 6,009 箇所と認知症対応型共同生活介護事業所 9,488 箇所を対象として、利用者の状態像に関する郵送調査を実施し、合計 5,383 箇所（回収率 34.7%）から合計 19,161 名分の調査票を回収した。本年度は、そのうち 18,236 名分を解析対象とした。本研究における分析は、状態像に関する項目を縮約し、摂食、排泄、入浴についてよく見られる課題（ニーズ）の出現との関連を明らかにすることを目的とした。まず、状態像に関する項目については、視力、聴力、ADL（バーセルインデックス）、出来事の記憶、見当識、判断、言語コミュニケーション、認識と動作、感情表現、変化への混乱、自発的活動、活動意欲、妄想、不安・恐怖、幻覚、不穏暴言、反復的動作の 17 領域に分類し、複数項目を含む場合には特性に応じた得点化を行った。認知症高齢者によくみられる摂食、排泄、入浴に関する課題（介護ニーズ）をそれぞれ 3 つずつ取り上げて、17 種類の全般的な状態像に摂食、排泄、入浴のそれぞれに特有の状態を数項目加えて独立変数として、それぞれの介護上の課題（ニーズ）の有無を従属変数としたロジスティック回帰分析を、ADL によって低・中・高群の 3 群に分けて行い、調整後のオッズ比を求めた。その結果、例えば「途中で食べることをやめてしまう」については、ADL の状態が全般に良好である場合には、食事に特化して意欲や認知が低下している場合に生じやすいこと、また全般的な行動としては認識と動作（複雑動作や模倣）や全般的な意欲低下によって生じやすいことなどが示唆され、それぞれの課題について全般的な ADL の低下がみられない場合の状態像の特徴について明らかにすることができた。

A. 研究目的

本研究課題の目的である状態像に応じた標準的な日常生活上の介護方法の開発を行うために、本研究では、認知症高齢者の日常生活における摂食、排泄、入浴に関する課題（介護ニーズ）の出現とそのときの状態像の特徴について明らかにすることを目的とした。

B. 研究方法

1. 調査方法

1) 調査対象

認知症高齢者の介護ニーズと状態像を収集するために、全国の介護施設や事業所に対して無記名で入居者・利用者の観察を依頼し、その結果を収集した。調査対象は、全国の介護老人福祉施設（以下、特別養護老人ホームと呼ぶ）および認知症対応型共同生活介護事業所（以下、認知症グループホームと呼ぶ）とした。平成 19 年 12 月現在の施設・事業所を悉皆調査とし、全国の特別養護老人ホーム 6,009 箇所、認知症グループホーム 9,488 箇所に調査依頼を郵送で行った。

各施設・事業所には、調査協力の依頼とともに、利用者の状態像に関する調査票 4 名分を同封し、入居者のうち、①要介護認定を受けていて、認知症であることが明らかな利用者の方、②食事（摂食）、排尿、入浴、着替えの 4 つの生活機能のいずれかについて支援を必要としている方（複合していても構わないこととした）の 2 つの条件に当てはまる方をランダムに選定してもらい、その状態像や介護の内容等について、各施設・事業者の保有する記録と担当職員の方の日常の観察を中心として記入を依頼した。

なお、調査対象とする人数は 1～4 人の範囲として、人数に応じて以下のような依頼を行った（ただし、条件に当てはまる入居者がいない場合にはこの限りではないこととした）。

(1) 4 名の調査に協力できる場合

できる限り要介護 2、3、4、5 に認定されている方をそれぞれ 1 名ずつ選んでもらうこととした。また 4 名の方で、②の 4 つの生活機能について、できる限りすべて対象としてもらうことを依頼した。

(2) 3 名の調査に協力できる場合

できる限り要介護 2、3、4 に認定されている方をそれぞれ 1 名ずつ選んでもらうこととした。また 3 名の方で、②の 4 つの生活機能について、できる限り 3 つ以上を対象とすることを依頼した。

(3) 2 名の調査に協力できる場合

できる限り要介護 3、4 に認定されている方をそれぞれ 1 名ずつ選んでもらうこととした。また、②の 4 つの生活機能のうち、どれを対象としてもよいこととした。

(4) 1 名の調査に協力できる場合

できる限り要介護 3 に認定されている方を 1 名選んでもらうこととした。また②の 4 つの生活機能のうち、どれを対象としてもよいこととした。

2) 調査の内容

調査票は ADL、I ADL、認知症の中核症状、周辺症状に関する項目で構成されている部分（前半）と、食事、排尿、入浴、着替えに関する介護ニーズや状態像に関する質問項目を含んでいた（付録参照）。

(倫理面への配慮)

「利用者調査」については、「疫学調査に関する倫理規定」(文部科学省・厚生労働省平成16年12月28日改正)を準用し、「匿名化されて」「個人情報を取得しない」「人体から採取した資料を用いない」「既存資料等のみを利用する観察調査」として実施した。規定上、個別のインフォームドコンセントを必ずしも必要としないが、その代わりに研究に関する情報を開示することとされており、開示情報の説明書を添付した。また、調査票の返送をもって調査協力についての承諾が行われたものと取り扱った。また、社会福祉・公衆衛生の向上を目的とした学術研究と位置づけ、得られたデータは研究およびその成果を元にした社会的還元以外の目的には使用しないことを明記した。

取得したデータの取り扱いについては、以下のことを明記した。

- ・回収した質問票は認知症介護研究・研修仙台センターにおいて、研究期間終了後1年間保管し、その後は他に利用されることがないような方法で破棄する。
- ・結果の公表は、統計的に解析したものを対象とし、施設・事業所単位や個人単位の事例報告には用いない。
- ・調査データは個人名について匿名化されているため個人情報の取得に該当しない。
- ・コンピュータに入力する際には、施設・事業所名はデータ化しない。入力されたデータは、インターネットに接続するコンピュータでは取り扱わないようにして、データ流出が生じないようにする。

C. 結果と考察

1. 回収及び分析データ

特別養護老人ホーム・認知症グループホーム合計で5,383件を回収することができた(回収率34.7%)。なお、施設・事業所種別は返信用封筒からは識別できないため合計で取り扱った(調査票には施設・事業所種別を記入する欄があり、個別の調査票については区分が可能である)。利用者調査については合計19,161名分の調査票を回収し、性・年齢・要介護度が不明な調査票を除いた18,236名分を解析対象とした。

なお、本調査の結果は利用者のレベルでランダムサンプリングされたものとはいえず、本データ分析における状態像の出現率等には日本の現況を表す代表性はないものと考えられる。しかし、ニーズと状態像の関係性を検討する材料としては有用であり、本研究においてもそのような解析方法を中心とする。

2. 状態像に関する項目の縮約化

項目を内容に応じて、視力(1項目)、聴力(1項目)、ADL(バーセルインデックス:10項目)、出来事の記憶(3項目)、見当識(1項目)、判断(1項目)、言語コミュニケーション(4項目)、認識と動作(3項目)、感情表現(1項目)、変化への混乱(1項目)、自発的活動(1項目)、活動意欲(1項目)、妄想(6項目)、不安・恐怖(5項目)

目)、幻覚 (5 項目)、不穏暴言 (3 項目)、反復的動作 (4 項目) に分類し、1 項目が所属する場合にはその項目の得点を用い、複数項目が所属する場合には以下の通り、サーストン尺度として合成得点を算出する場合とガットマン尺度として程度に応じた付点を行う場合に分けて得点の算出を行った。

(1) 視力

視力については、「見える」=1 点、「やや見えにくい」=2 点、「かなり見えにくい」=3 点を付与した。

(2) 聴力

聴力については、「聞こえる」=1 点、「やや聞こえにくい」=2 点、「かなり聞こえにくい」=3 点を付与した。

(3) ADL

ADL の評価には 10 項目のバーセルインデックスを用い (資料参照: 食事から排尿コントロールまで)、既定の配点に基づいて合計点を算出した (100 点満点)。

(4) 出来事の記憶

出来事の記憶については、10 分、1 日、1 週間という期間ごとに記憶の状況を質問する項目を設けた。そのため、1 週間程度において「覚えていることがある」「覚えていることが多い」場合には 1 点、1 日程度において「覚えていることがある」「覚えていることが多い」場合には 2 点、10 分程度において「覚えていることがある」「覚えていることが多い」場合には 3 点、10 分程度で「すぐ忘れる」場合には 4 点を付与した。

(5) 見当識

見当識については、時間・場所の認識について「理解している」=1 点、「言えば理解できる」=2 点、「言ってもわからない」=3 点を付与した。

(6) 判断

判断については、日常生活で次にすることを判断することが、「自分でできる」=1 点、「言えばわかることが多い」=2 点、「言ってもわからない」=3 点を付与した。

(7) 言語コミュニケーション

言語コミュニケーションについては、『ことば・話しの理解』、『話をする頻度』、『話をする際の意思の伝達』について、各項目の得点 (各 1~3 点) の合成得点を算出した。

(8) 認識と動作

認識と動作については、『物の認識 (誤認の程度)』、『複雑な動作 (着替えなど)』、『動作の模倣』について、各項目の得点 (各 1~3 点) の合成得点を算出した。

(9) 感情表現

感情表現については、感情を「うまく表現できる」=1 点、「ときどき激しく表現する」=2 点、「激しく表現することが多い」=3 点、「ほとんど表現しない」=4 点を付与した。

(10) 変化への混乱

変化への混乱については、環境の変化に対して「適応できることが多い」=1 点、「少

し混乱しやすい」＝2点、「激しく混乱する」＝3点を付与した。

(11) 自発的活動

自発的活動については、自発的に「よく動く」＝1点、「少し動く」＝2点、「ほとんど動かない」＝3点を付与した。

(12) 活動意欲

活動意欲については、全般的な意欲活力について「いつも意欲がある」＝1点、「意欲が低いときがある」＝2点、「ほとんどない」＝3点を付与した。

(13) 妄想

妄想については、『物盗られ妄想』、『配偶者が偽物である妄想』、『見捨てられ妄想』、『不義不実妄想』、『猜疑心』、『その他の妄想』の6項目について、それぞれ4段階で評定し、6項目中の最も重度な回答を得点として採用した（1～4点）。

(14) 不安・恐怖

不安・恐怖については、『激しい抑うつ』、『間近な約束や予定への不安』、『その他の不安』、『独りぼっちになる恐怖』、『その他の恐怖』の5項目について、それぞれ4段階で評定し、5項目中の最も重度な回答を得点として採用した（1～4点）。

(15) 幻覚

幻覚については、『幻視』、『幻聴』、『幻嗅（におい）』、『幻触』、『その他の幻覚』の5項目について、それぞれ4段階で評定し、5項目中の最も重度な回答を得点として採用した（1～4点）。

(16) 不穏暴言

不穏暴言については、『威嚇や暴力』、『暴言』、『不穏（攻撃的な雰囲気や言動）』の3項目を設けた。『威嚇・暴力』において「激しい暴力あり」および「暴力的行動あり」であった場合には6点、「威嚇あり」であった場合には5点、『暴言』において「他人に向けられる」および「怒りが伴う」であった場合には4点、「言葉遣いの点であり」であった場合には3点、『不穏』において「行動に現れる」、「感情的な言動がある」、「雰囲気がある」場合には2点、いずれもない場合には1点を付与した。

(17) 反復的動作

反復的動作については、『徘徊』、『行動の反復』、『必要なものを捨てたり、不適切な場所に置く』、『帰宅願望』の4項目について、それぞれ4段階で評定し、4項目中の最も重度な回答を得点として採用した（1～4点）。

3. 摂食、排泄、入浴に関する課題（ニーズ）と状態像の関連

認知症高齢者によくみられる摂食、排泄、入浴に関する課題（介護ニーズ）をそれぞれ3つずつ取り上げて、その有無に対して影響を与える状態像について検討した。そのために、前項で整理した17種類の状態像に摂食、排泄、入浴のそれぞれに特有の状態を数項目加えて独立変数として、9種類のそれぞれの介護上の課題（ニーズ）の有無を従属変数としたロ

ジスティック回帰分析を行い、各独立変数についての調整後のオッズ比を求めた。また、これらの課題（ニーズ）はADLの状態に大きく影響を受けるため、バーセルインデックスの得点によって3群に分けて、群別に解析を行った。群分けの境界は40点と70点とし、バーセルインデックスの得点が40点以下であれば、「ADL低群（L群）」、41～70点であれば「ADL中群（M群）」、71点以上であれば「ADL高群（H群）」とした。その結果、「ADL低群（L群）」は7,388名、「ADL中群（M群）」は5,949名、「ADL高群（H群）」は3,238名となった。さらに独立変数にもバーセルインデックス（ADL）を投入して、ADLの影響の調整を行ったうえで他の状態像の影響を検討した。

ADL以外の指標はすべて状態が悪い場合に高得点を付与したので、オッズ比の点推定値が1を超えていることおよび95%信頼限界の下限が1を超えている場合に、その状態が悪いことによって各課題（ニーズ）が有意に生じやすいことを示す（表および資料中では*マークで示した）。逆にオッズ比の点推定値が1未満であることおよび95%信頼限界の上限が1未満である場合に、その状態がよいことによって各課題（ニーズ）が生じやすいことを示す（表および資料中では-マークで示した）。ADLについては、逆に状態がよい場合に高得点を付与したので、点推定値が1を超えていることおよび95%信頼限界の下限が1を超えている場合に、状態がよいことによって各課題（ニーズ）が有意に生じやすいことを示す（表および資料中では-マークで示した）。逆に点推定値が1未満であることおよび95%信頼限界の上限が1未満である場合に状態が悪いことによって各課題（ニーズ）が生じやすいことを示す（表および資料中では*マークで示した）。

とくに本研究においては、ADLが良好であるにもかかわらず、日常生活上の課題（ニーズ）を持つ場合の状態像の特徴について明らかにすることを中心として考察した。

（1）摂食の課題

摂食の課題としては、「自力では全く食事ができない」、「途中で食べることをやめてしまう」、「他の人の食事に手を出す」の3つを解析の対象とした。また、食事特有の状態像項目として、「座位姿勢の保持困難」、「腕が動かない」、「指がうまく動かない」、「食事意欲が低い」、「食卓上の認知困難」、「食事時間の認識困難」、「食べることが好き」の7項目を独立変数として追加した。

解析結果のうち、オッズ比の有意性について集約したものを表1に示した。なお、それぞれの解析結果は資料1－1・2・3、資料2－1・2・3、資料3－1・2・3に示した（付録参照）。

①「自力では全く食事ができない」（表2－1、資料1－1・2・3）

ADL高群では該当者が3名（0.1%）しかおらず、解析不能であった。ADL中群でも該当者は39名（0.7%）に留まり、この課題（ニーズ）についてはADLが強く影響を及ぼしているといえる。ADL低群では該当者は16.2%であった。ADL中群におけるオッズ比では、「幻覚」、「食事意欲が低い」において状態像が悪い場合に該当率が高まる方向性で有意であった点が、ADL低群の結果と異なっていた。「言語コミュニケーション」、「認

識と動作」、「(全般的な) 活動意欲」についてはADL低群では、状態像が悪い場合に該当率が高まる方向性で有意であったが、ADL中群では有意ではなかった。「反復的動作」についてはADL低群では、状態像が良い場合に該当率が高まる方向性で有意であったが、ADL中群では有意ではなかった。

これらを総合して考察すると、「自力では全く食事ができない」ことは、ADLの状態が全般に良好あるいは中程度である場合には生じにくく、ADLが低い場合には、「活動意欲」や「認識と動作」の課題を伴いやすく、「反復的動作」や「不穏暴言」の課題は伴いにくいことが示唆された。

②「途中で食べることをやめてしまう」(表2-1、資料2-1・2・3)

ADL低群では3,175名(43.0%)、ADL中群では1,282名(21.5%)、ADL高群では139名(4.3%)の該当者がおり、ADLが強く影響を及ぼしているものの、他の要因も影響を持っている課題と考えられる。ADL高群におけるオッズ比では、食事に特有の状態である「食事への意欲」、「食卓上の認知」、「食事時間の認識」が状態像が悪い場合に該当率が高まる方向性で高かった。しかし、「認識と動作」、「活動意欲」において状態像が悪い場合に該当率が高まる方向性で有意であった点が、ADL中群や低群の結果と異なっていた。また、「反復的動作」についてはADL低群や中群と共通していたが、状態像が悪い場合に該当率が高まる方向性で有意であった。

これらを総合して考察すると、「途中で食べることをやめてしまう」ことは、ADLの状態が全般に良好である場合に、食事に特化して意欲や認知が低下している場合に生じやすいこと、また全般的な行動としては認識と動作(複雑動作や模倣)について課題がある場合に生じやすいこと、全般的な意欲低下によっても生じやすいことが示唆された。

③「他の人の食事に手を出す」(表2-1、資料3-1・2・3)

ADL低群では1,815名(24.6%)、ADL中群では1,034名(17.4%)、ADL高群では167名(5.2%)の該当者がおり、ADLが強く影響を及ぼしているものの、他の要因も影響を持っている課題と考えられる。ADL高群におけるオッズ比では、食事に特有の状態である「食べることが好き」、「食卓上の認知」、「食事時間の認識困難」が、状態像が悪い場合に該当率が高まる方向性で高かった。また、「反復的動作」、「認識と動作」、「記憶」「不穏暴言」、「言語コミュニケーション」において状態像が悪い場合に該当率が高まる方向性で有意であったが、ADL中群や低群の結果と類似していた。

これらを総合して考察すると、「他の人の食事に手を出す」ことは、ADLの状態が全般に良好である場合にも、食べることが好きで食事に特化して意欲や認知が低下している場合に生じやすいこと、また全般的な行動としては認識と動作(複雑動作や模倣)について課題がある場合に生じやすいこと、記憶とコミュニケーションの課題によっても生じやすいことが示唆された。

表 2-1 オッズ比の有意性比較表（食事）

項目
1=自力では全く食事ができない
2=途中で食べることをやめてしまう
3=他の人の食事に手を出す

ADL
L ADL低群
M ADL中群
H ADL高群

	項目1			項目2			項目3		
	L	M	H	L	M	H	L	M	H
視力	*				-		-		
聴力	-			-			-	-	
ADL	*	*		-	*	*	-	*	*
記憶				*	*		*	*	*
見当識				*	*		*	*	
判断				*			*	*	
言語コミュニケーション	*			*			*	*	*
認識と動作	*				*		*	*	*
感情表現				-			-		
変化への適応									
自発的行動				*			-	-	-
活動意欲	*				*		-		
妄想				-			-	-	
不安				*					
幻覚		*		*	*			*	
不穏暴言	-	-		*			*	*	*
反復的動作	-			*	*	*	*	*	*
座位姿勢の保持困難	*								
腕が動かない	*	*		-			-		
指がうまく動かない				*					
食事意欲が低い		*		*	*	*	-	-	
食卓上の認知困難	*	*		*	*	*	*	*	*
食事時間の認識困難				*	*	*	*	*	*
食べることが好き	-			-	-		*	*	*

*: 状態像が悪いと、ニーズ項目への該当率が高い

-: 状態像が良いと、ニーズ項目への該当率が高い

※項目1のH群は、該当例数が少なく解析不能であった

(2) 排泄（排尿）の課題

排泄の課題としては、「排尿の介助を嫌がる」、「よく漏らしてしまう」、「ときどき漏らしてしまう」の3つを解析の対象とした。また、排泄(排尿)特有の状態像項目として、「おむつ使用」、「ポータブルトイレ使用」、「トイレ使用」、「尿とりパッド使用」の4項目を独立変数として追加した。これら4項目は状態像としての良し悪しではなく、「使用」に該当する場合に高得点を付与した。

解析結果のうち、オッズ比の有意性について集約したものを表2-2に示した。なお、それぞれの解析結果は資料4-1・2・3、資料5-1・2・3、資料6-1・2・3に示した（付録参照）。

①「排尿の介助を嫌がる」(表2-2、資料4-1・2・3)

ADL低群では924名(12.5%)、ADL中群では604名(10.2%)、ADL高群では120名(3.7%)の該当者がおり、ADLが影響を及ぼしているものの、他の要因も影響を持っている課題と考えられる。ADL高群におけるオッズ比では、排泄に特有の状態である「トイレ使用」や「尿取りパッド利用」の場合に該当率が高まる方向性で高かった。さらに「不穏暴言」だけが状態像が悪い場合に該当率が高まる方向性で有意であったが、ADL中群や低群の結果と同様の結果であった。むしろ、ADL中群や低群では「反復的動作」や「言語コミュニケーション」について状態像が悪い場合に該当率が高まる方向性で有意であった点がADL高群では見られなかった。

これらを総合して考察すると、「排尿の介助を嫌がる」ことは、ADLの状態が全般に良好である場合には、トイレ介助を必要とする場合に不穏・暴言があるときに生じやすいことが示唆された。

②「(尿を)よく漏らしてしまう」(表2-2、資料5-1・2・3)

ADL低群では3314名(44.9%)、ADL中群では1770名(29.8%)、ADL高群では225名(6.9%)と全体として該当者が多かった。ADLが影響を及ぼしているものの他の要因も影響を持っている課題と考えられる。どの群でも排泄に特有の状態である「トイレ使用」、「おむつ使用」、「尿取りパッド利用」の場合に該当率が高まる方向性で高かった。さらにADL高群におけるオッズ比では、「認識と動作」について状態像が悪い場合に該当率が高まる方向性で有意であり、「変化への適応」では状態像がよい場合に該当率が高まる方向性で有意であった。これは他の2群では認められずADL高群に特有の傾向であった。一方、他の2群では「不穏暴言」、「反復的動作」「記憶」について状態像が悪い場合に該当率が高まる方向性で有意であったが、ADL高群では有意ではなかった。

これらを総合して考察すると、「(尿を)よく漏らしてしまう」ことは、ADLの状態が全般に良好である場合には、認識と動作に課題がある場合に生じやすく、また変化に対する適応力が良好な場合にも生じやすくなることが示唆された。

③「(尿を)ときどき漏らしてしまう」(表2-3、資料6-1・2・3)

ADL低群では1,616名(21.9%)、ADL中群では2,593名(43.6%)、ADL高群では880名(27.2%)と全体として該当者が多く、またADLの障害が中・軽度の場合に生じやすくADL以外の要因が影響を及ぼしている課題と考えられる。ただし、ADL低・中群においては、ADLについて状態像がよい場合に該当率が高まる方向性で有意であったのに対して、ADL高群においては、ADLについて状態像が悪い場合に該当率が高まる方向性で有意であり、ADL高群ではADLが影響を与えているといえる。

どの群でも排泄に特有の状態である「トイレ使用」、「尿取りパッド利用」の場合に該当率が高まる方向性で高かったが、「おむつ使用」については、ADL低・中群では使用している場合に、ADL高群では使用していない場合に該当率が高まる方向性で有意であった。

オッズ比が有意な項目は全体に少なかった。ADL高群におけるオッズ比では、「反復的動作」について状態像が悪い場合に該当率が高まる方向性で有意であった。これは他の2群では認められずADL高群に特有の傾向であった。該当率の最も高いADL中群ではオッズ比が有意な状態像が認められず、ここにあげた状態像項目ではとらえきれない要因がある、または影響を与える要因がさまざまであるものと推察される。ADL低群におけるオッズ比では、「不安」について状態像が悪い場合に該当率が高まる方向性で有意であり、「見当識」、「不穏暴言」では状態像がよい場合に該当率が高まる方向性で有意であった。

これらを総合して考察すると、「(尿を)ときどき漏らしてしまう」ことは、ADLの状態が全般に良好である場合には、ADLに課題がある場合に生じやすく、また徘徊などの反復的動作がある場合にも生じやすくなることが示唆された。

表2-2 オッズ比の有意性比較表（排泄）

項目	ADL								
	L ADL低群			M ADL中群			H ADL高群		
14=排尿の介助を嫌がる									
15=よく漏らしてしまう									
16=ときどき漏らしてしまう									
	項目14			項目15			項目16		
	L	M	H	L	M	H	L	M	H
視力				-		-	*		
聴力									
ADL	-		*		*	*	-	-	*
記憶	*			*	*				
見当識				*			-		
判断					*				
言語コミュニケーション	*	*							
認識と動作						*			
感情表現									
変化への適応	*					-			
自発的行動									
活動意欲									
妄想	*				*				
不安	-	-					*		
幻覚	-								
不穏暴言	*	*	*	*	*		-		
反復的動作	*	*		*	*				*
おむつ使用		*		*	*	*	-	-	*
ポータブルトイレ使用							*		
トイレ使用	*	*	*	*	*	*	*	*	*
尿とりパッド使用	*	*	*	*	*	*	*	*	*

*：状態像が悪いと、ニーズ項目への該当率が高い

-：状態像が良いと、ニーズ項目への該当率が高い

(3) 入浴の課題

入浴の課題としては、「浴室に行くのを嫌がる」、「浴室内で入浴行為を嫌がる」、「入浴の介助を拒絶する」の3つを解析の対象とした。また、入浴特有の状態像項目として、「主に機械浴槽を使用」、「主に個別浴槽を使用」、「主に大浴槽を使用」の3項目を独立変数として追加した。これら3項目は状態像としての良し悪しではなく、「使用」に該当する場合に高得点を付与した。

解析結果のうち、オッズ比の有意性について集約したものを表2-3に示した。なお、それぞれの解析結果は資料7-1・2・3、資料8-1・2・3、資料9-1・2・3に示した(付録参照)。

①「浴室に行くのを嫌がる」(表2-3、資料7-1・2・3)

ADL低群では1,198名(16.2%)、ADL中群では1,305名(21.9%)、ADL高群では558名(17.2%)の該当者がおり、ADLよりも他の要因が影響を持っている課題と考えられる。ADL高群では入浴の形態として「主に個別浴槽を使用」、「主に大浴槽を使用」の場合に該当率が高まる方向性でオッズ比が高かった。しかし、状態像としては、3群とも共通に「記憶」、「変化への適応」、「活動意欲」、「不穏暴言」、「反復的動作」において、状態像が悪い場合に該当率が高まる方向性でオッズ比が有意であり、ADL高群特有の特徴は見られなかった。

これらを総合して考察すると、「浴室に行くのを嫌がる」ことは、ADLの状態に関わらず、記憶の持続が短いこと、変化に対する適応が悪いこと、活動への意欲が低いこと、不穏状態や暴言があることや徘徊等の反復的動作があることによって、浴室に行くのを嫌がるが生じやすいことが示唆された。

②「浴室内で入浴行為を嫌がる」(表2-3、資料8-1・2・3)

ADL低群では1,130名(15.3%)、ADL中群では696名(11.7%)、ADL高群では156名(4.8%)の該当者がおり、ADLが影響を及ぼしているものの、他の要因も影響を持っている課題と考えられる。ADL高群では入浴の形態として「主に個別浴槽を使用」の場合に該当率が高まる方向性でオッズ比が高かった。状態像としては、3群とも共通に「変化への適応」、「不穏暴言」において、状態像が悪い場合に該当率が高まる方向性でオッズ比が有意であった。ADL高群だけの特徴としては、「感情表現」において、状態像が悪い場合に該当率が高まる方向性でオッズ比が有意であった。また、ADL低群・中群では、「記憶」、「判断」、「反復的動作」において、状態像が悪い場合に該当率が高まる方向性でオッズ比が有意であったが、ADL高群では有意ではなかった。

これらを総合して考察すると、「浴室内で入浴行為を嫌がる」ことは、ADLの状態に関わらず、変化に対する適応が悪いこと、不穏状態や暴言があることによって、浴室に行くのを嫌がるが生じやすく、とくにADLの状態が全般に良好である場合には感情表現が極端になる場合に生じやすいことが示唆された。

③「入浴の介助を拒絶する」(表2-3、資料9-1・2・3)

ADL低群では968名(13.1%)、ADL中群では627名(10.5%)、ADL高群では183名(5.7%)の該当者がおり、ADLがやや影響を及ぼしているものの、他の要因が影響を持っている課題と考えられる。ADL高群では入浴の形態として「主に個別浴槽を使用」の場合に該当率が高まる方向性でオッズ比が高かった。状態像としては、3群とも共通に「不穏暴言」において、状態像が悪い場合に該当率が高まる方向性でオッズ比が有意であった。ADL高群だけの特徴としては、「活動意欲」において、状態像が悪い場合に該当率が高まる方向性でオッズ比が有意であり、「自発的行動」において、状態像がよい場合に該当率が高まる方向性でオッズ比が有意であった。また、ADL低群・中群では、「記憶」、「言語コミュニケーション」、「変化への適応」において、状態像が悪い場合に該当率が高まる方向性でオッズ比が有意であったが、ADL高群では有意ではなかった。

これらを総合して考察すると、「入浴の介助を拒絶する」ことは、ADLの状態に関わらず、記憶の持続が短いこと、コミュニケーションがうまくいかないこと、変化への適応が悪いことによって生じやすいと考えられる。またADLの状態が全般に良好である場合には、活動意欲がないこと、一方で自発的に行動する傾向があることによって「入浴の介助を拒絶する」ことが生じやすいことが示唆された。

表2-3 オッズ比の有意性比較表（入浴）

項目
1=浴室に行くのを嫌がる
3=浴室内で入浴行為を嫌がる
11=入浴の介助を拒絶する

ADL
L ADL低群
M ADL中群
H ADL高群

	項目1			項目3			項目11		
	L	M	H	L	M	H	L	M	H
視力			-			-			-
聴力	*								
ADL	-			-					
記憶	*	*	*	*	*		*	*	
見当識							*		
判断				*	*				
言語コミュニケーション	-						*	*	
認識と動作		-			-				
感情表現	-			-		*			
変化への適応	*	*	*	*	*	*	*	*	
自発的行動	*								-
活動意欲	*	*	*		*				*
妄想	*	*					*		
不安									
幻覚		-							
不穏暴言	*	*	*	*	*	*	*	*	*
反復的動作	*	*	*	*	*		*	*	
主に機械浴槽を使用	-				*				
主に個別浴槽を使用			*	*	*	*			*
主に大浴槽を使用			*		*				

*: 状態像が悪いと、ニーズ項目への該当率が高い

-: 状態像が良いと、ニーズ項目への該当率が高い

D. 結論

本研究では、特別養護老人ホームおよび認知症グループホームにおいて介護サービスを利用している認知症高齢者を対象として、さまざまな状態像と摂食、排泄（排尿）、入浴に関する介護ニーズとの関係を検討した。本研究における調査及び分析の手法は横断的なものであり、状態像が原因で介護ニーズがその結果生じたものであるとはいえないことは言うまでもない。その逆に、介護ニーズに発生によって生じた状態像である可能性が強いものもあった。例えば、入浴における「個別浴槽の使用」は、それぞれの介護ニーズの発生とADLの状態を勘案して、大浴槽から個別浴槽に変更したケースがあると考えられる。しかし、認知症ケアの現場では、本研究で解析対象としたような介護ニーズが発生した場合に、それを最初に発生させた介護ニーズを追及して明らかにしても、ニーズが顕在化した時点では、その介護ニーズが新たな状態像を生じさせている原因となっている場合もあり、ニーズと状態像の関係は単純な因果関係ではなく、より複雑な双方向的な関係となっていると考えられる。本研究の結果も、そのような双方向的な視点で見る必要があり、こ